



CRC ミニシンポジウム

植物の気象反応を科学する —マクロとミクロの視点の連携—

光や温度、湿度など気象に対する植物の反応を定量化するには、非常に多くの観察を踏まえなければならない。先人による精力的な研究から、貴重な知見や数量的な関係が見いだされ、作物の育種や栽培などに応用されてきた。しかし植物の外面に現れる現象から、内部で起こる複雑なプロセスを推し量ることは難しいため、これらの知見は、多くの場合、経験的で、その適用範囲も限定される。いわば“かゆいところに手が届かない”もどかしさがある。一方、近年、分子レベルの研究手法が飛躍的な発展を遂げ、タンパクや遺伝子の機能やシグナルの流れなどを明らかにできるようになった。観察が発見した現象を、分子レベルで解き明かすことができれば、作物生産に関する知見や技術がより堅固なものとなるだろう。今回のミニシンポジウムでは、イネを素材にして、このような研究の試みをいくつか紹介する。

2015年2月20日（金）13：00～17：30
岩手大学農学部1号会議室（1号館2階）

講演：

イネは当日の天気を「観測」して根のアクアポリンの発現を調節している
村井（羽田野）麻理（東北農業研究センター）

イネ幼苗の低温障害：地温・気温バランスが引き起こす障害のメカニズム
鈴木健策（東北農業研究センター）

イネ晩生変異体から見えてきた出穂と温度の関係
横井修司・吉津祐貴（岩手大学）

イネの短日感応に及ぼす気温の作用
岡田益己（岩手大学）

大気中CO₂濃度上昇を利用した「第2の緑の革命」を目指して
下野裕之（岩手大学）

コーディネーター：岡田益己（客員教授、mok@iwate-u.ac.jp）

（終了後、講師を囲んでの懇談会を予定しています。参加希望者はコーディネーターまでご連絡下さい）